

# 「完璧な病室」

— 閉じた世界と開かれた世界 —

越 智 悦 子

## はじめに

最近の若者たちの、△朝シャン▽に代表される過度の清潔志向を、「△あらう▽」ことは、汚れをおとすために必要な身づくろいであるよりも、いつも清潔でなければならないという強迫観念をしずめるための儀式に近づいている」と分析する新聞記事に、こうした世相を反映した作品として引用されている小川洋子氏の「完璧な病室」は、一九八九年度第一〇一回芥川賞候補作となったものである。

毎日規則正しくクレンザーでピカピカに磨き上げられる真白な生活臭のない病室を大変気に入り、そこに完全に近い安らぎを得る主人公のあり方を「清潔願望のゆきつく果てが描かれていて、とてもこわい。清潔へのこだわりは、この小説では死のイメージに直結している。生を洗いつくすと、死が露出したのだ。」とする新聞（木股知史）氏の説みを、いま少し深めてみたい。

## (一)

この小説は、弟のことから語り始められる。主人公である語り手△わたし▽にとつて、二十一才の若さで死んだ弟は「あまりにもいとおしい存在なのだ」と。この△わたし▽のいとおしさは、死に向かつてのみ存在した白血病（らしく書かれている）の弟に向けられたものであるが、この△わたし▽の、死のみとつながることによって、純粋な、ほとんど透明とも言えるような存在になつて行く弟に対して抱かれるいとおしさに象徴される感情は、病院における△わたし▽と弟との関係とは対照的に△わたし▽によつて嫌悪されている、一般的な日常生活を共に営んでいる△わたし▽と夫との関係を、さらには△わたし▽と秩序を失った母親との関係を背後に抱え込んでいる。

まず、この三者——弟・夫・母——との関係における△わたし▽のあり方をながめてみたい。

「△わたし▽は「床やユニットバスのホーローは丁寧に磨き込」まれ、「シーツには程よく糊がきて染み一つない」「すべてがきちんと清潔に保たれている」病室に、「ガラス細工」のような弟と二人静かに対峙している時、その世界を「完璧な」ものと感じている。△わたし▽は「病室にいと、産湯につかった赤ん坊のように、安心」でき、「病室がとても好きになっていた。」なぜならば「そこに、生活がなかったからだ。」と語る。

病を得た弟は、都内の大学病院に勤務する姉である△わたし▽に救いの電話をかけてきた時、「冷蔵庫に残った卵やケチャップのこと、更新したばかりのスイミングクラブの会員券のこと、ゼミの教授に頼まれた文献整理のこと、そんな日常的で、いくらでも取り返しのつくような種類の問題」ばかりを気にかけて、その気がかりを姉に訴えた。しかし、それ以後彼は、こうした「いくらでも取り返し」がつくと我々が考えている物事、つまり日常の△生▽から切り離され、△死▽へとつながれて行く。非日常の事態に陥った弟に付き添うことによって、自らも非日常世界にもぐり込んだ△わたし▽は、「いくらでも取り返しがつく」はずの日常が取り返しのつかないものとなってしまったことに涙を流す弟とは対照的に、自分にとっては「いくらでも取り返しのつく」日常を忌避すべきものと感じるようになる。△わたし▽にとって夫との日常は、「食べて寝てごみを捨てる。生活そのもの」であり、その繰り返しにしかすぎない。そうした日常から切り離されてい

ることを自覚する弟の、「僕は、いろいろなことを何にも知らないまま、死んでいくんだね。結婚だって僕には絶対経験できないことだ。時間がなさすぎる。」僕はセックスだって知らないまま、死ぬんだ。」という悲嘆に対して、「セックスって」、「そんな特別扱いするべきものじゃないわ。生活の一部、繰り返しの一部よ。」「うすのろの生活の中で、みんなが当たり前に行っていることよ。それを、生きている間にやったかやらなかったかなんて、たいした問題じゃないわ。」と答える。

弟と二人きりで、真白に磨きあげられた、外界とは遮断された病室での非日常の世界に安らぎを感じ、そこへ閉じ籠りたいと感じる△わたし▽にとっては、「時間が止まったみたい」にひっそりと「生活の汚れから遠く隔離されていて、誰にも邪魔されず二人きりで」「過ごす」弟とのあり方がなによりも「快感」だったのである。

## (二)

△わたし▽にとっての、単なる生活の繰り返しにすぎない日常とは、夫との暮らしである。この日常生活に対する嫌悪は、夫、つまり生殖の一方を担うパートナーとしての生身の肉体を持つ存在である人間の、△食事▽というさらに最も基本的な、△生▽を支える必然的行為に対するグロテスクなまでの観察と、それを見続ける△わたし▽の内面を通して語られる。

午前三時頃帰宅した夫のために「ビーフシチューとグリーンサラダとロールパン二個」を用意して、△わたし▽は夫の向いに座る。空腹を満たすべく夫は深夜の食事にとりかかる。食事をする夫の様子を向いから黙ってながめつつ、△わたし▽はシチュー皿の中の澱んだ茶色の液体を口に運ぶ夫の仕草を、「茶色の雫が一筋、唇の縫合にそってこぼれそうになると、二枚貝が呼吸するように、柔かい舌が伸びて来てそれを吸い込んだ。肉の脂と唾液で縦皺が湿めった。」と観察する。そして、弟と自分をいたわる夫のやさしい言葉を聞いている——なんてあなたは優しいのだろう。そして、そんなに優しいのに、どうして無造作に何でもかんでも喉に押し込んで飲み込むことができるのだらう——と感じずにはいられない。「優しいことと食べるのが、正反対の動作であるかのように、矛盾に満ちた目で」夫をながめ、ビーフシチューの色や、それをかみくだく夫の「内側から聞えて」くる「とても肉体的な音」から、「チョコレート糞胞」に罹患した「卵巣摘出」の手術見学の記憶をよみ返らせ、「メスの刃の下からあふれてた」「吐き捨てたくなるような不快な」「血液の腐敗した色」を思い出して、眼前の夫の様子を「彼が唇を少し開く度に、彼の舌が腐った血液色に染まっている」と意識する。

この夫の旺盛な食事風景は、次第々々に食物が喉を通らなくなり、コールマン種のぶどう以外はうけつけなくなる弟との対比において、△わたし▽にどす黒い、重たく、暑くるしい△生▽の営

みと感受されたものである。そしてさらに△わたし▽には、「——食べる、ってことは、どうしてこんなに美しくないんだらう。——」「人間が起こす行動の中で、一番生理的で無意識的で官能的だ。料理はいつも、汚れた流し台と背中合わせ」のものだと感じられる。△わたし▽は汚れたものをすべて投げ棄ててしまいたい。「生活に關するあらゆる物をダスト室に投げ込んで、ガラス細工のようにすずやかに生きていけたら」と思わずにはいられないのである。

この△わたし▽の衝動、△食▽への嫌悪は何を表わしているのだろうか。△食べる▽という行為は、生き物である我々動物の生存にとって不可欠である。従って、非常に生理的で、食欲という原初的な欲求があらさまにされる行為は、それが原初的であればある程、本能を露呈するものとして我々に羞恥の念をおこさせる。この点を押し進めて考えると、△わたし▽の、羞恥を通り越した嫌悪、さらには△食べる▽という行為につながらない物々を汚れたものとみなし、それらすべてを投げ棄ててしまいたいという衝動を抱いてしまう根源に近づけるのではないだろうか。

我々は時代の進みゆきの中で、△人間▽とは原初的な本能につながる欲求を理性によってコントロールできる存在、それ故にこそ万物の霊長として生きとし生けるものすべてを、さらには自然そのものをも支配することができるようになった存在であると考え、自らを美しく、偉大なる存在と感じて来た。この高慢な認識

が、自然から復讐を受けつつあるのが△わたし√の状態、つまり一点の汚れもなく磨き上げられ、外界からは遮断された病室でしか安らぎを得ることができず、「——このままひっそりと無機物のように清らかに生きていきたいのに。何も変わらず、何も変性せず、何も腐敗せず、このままずっと弟と一緒にいられたらいいのに。——」と思ってしまう感覚なのではあるまいか。

近代産業革命に始まる工業文明の発達によって、我々人間は極端にまで分業の進んだ、何ごとによらずその全体像、実体の把握困難な人工的世界を作り上げた。人々はその人工的空間、時間の中で機械を相手に暮らすという生活習慣を身につけて行く。こうした自分たちの足元を支える土から、つまりは人間本来の動物としての存在を維持すべき自然から切り離された生活の中で、それでも動物としての肉体を持つ人間は、その肉体を維持するための必然的欲求は満たさざるを得ず、そこに生物としての生きた肉体に対する疎外が生まれて来る。

△わたし√が弟に語るように△生√とは「生活」のくり返しであり、「生活」とは食べて眠って、排泄して生殖するという一連の、まさに△生物√としての△人√の営みである。△わたし√には、その「生活」が嫌悪の対象となる。換言すれば生物としての△生√への嫌悪である。従って△死√への方向へ向かうものに対してしか心惹かれないのであるが、この△わたし√の方向性を決定づけたのは、心の病を持つ母との生活であった。△わたし√の、

生まましい現実の生活への嫌悪の背景には、母親との耐えがたい関係が、その秩序を失った生活の経験があった。この母親を通して、人間の精神的疎外が語られる。

### (三)

母親は、△わたし√によって「母親のことを考えるとき、最後に唇を思い浮かべる訳は、彼女の病気にあった。それはとても厄介な状況で、彼女の周りの人間がたくさん傷つけられた。彼女は、心の病気だった。」と紹介される。彼女は、まず「徹底的に氣力」をなくし、「家中が混乱してまとまりがつかなく」なる。数月後には「異様に気分が高まってきて」誰かれかまわず「一日中喋り続ける」。「そして相変わらず、家の中ではゲイニングテーブルの上でストッキングが丸まっていたり、洗濯機の中に徴のはえたオレンジが落ちていたり」「靴箱の上に腐りかけたきゅうりが転がっていたり」、生活の秩序がまったく失われているのである。

この母親が、母親の病気が生み出す「どこかが異常によじれた」「生活」が、△わたし√の生活嫌悪の根底にある、と△わたし√は語る。「自分がこの病室の行き届いた清潔さをこんなにも心地よく感じるのには、母親との薄汚れた雑然とした生活のせいだ」と△わたし√は考えるのである。

確かに△わたし√に生活嫌悪を、特に食物の腐敗していく姿に対する嫌悪を抱かせるきっかけは、母親との混乱した生活であっ

たかも知れない。しかし、ここで更に重要なことは、この母親の生活ぶり、その生き様、に対する嫌悪は、△わたし▽の「生活」そのもののへの嫌悪のみならず、△生活する人間▽つまりは生身の生きている人間としての實在、生身の實在としての他者への嫌悪をももたらしたのではないかとすることである。

母親は「心の病氣」を病んでいた。つまり△狂人▽、心の狂った人であった。しかし、それ故にこそ彼女は心の思うままに行動し、殺されるのである。母親は「銀行で強盗事件に巻き込まれ」、「カウンターの上で狼狽を構えた犯人の前へ、何のためらいもなくすたすたと近寄り」、「理路整然」と犯人を説諭しようとし、「射殺され」る。狂った母親には、むき出しの心があるばかりである。狂人であるが故に、彼女は何のためらいもなく自らをあるがままに表出できる。つまり、社会性を保つための上皮をかぶらぬ、その人ずばりそのままの、何の虚飾もない実体をあからさまにしている存在である。しかし、その何の防御もない、無邪気な天真そのものを露出している存在は、いわゆる分別を欠くが故に、相對する人間（他者）にとまどいを与えざるを得ない。社会に適用するバランスの取れた人間関係を作ることが出来ないのである。他者との本質的な深い出合いを可能にする、有りのままの心を持ちながらも、それが△狂▽というバランスを逸した、あまりにもむき出しのものであるが故に他者と関係を結ぶことのできない母親との生活への嫌悪と母親拒否とは、この母親の持つ不幸な両面

で△わたし▽の精神性を疎外していると嘗って良い。すなわち、自己の生きた人間性を精神の上において開く、つまり自己を有りのままに表出することへの拒否と、精神の暖かさを持ちながら、その中で他者と何らかの△関係▽を結び、継続して行くことへの拒否である。この両者があいまって生身の生きている人間としての實在（他者）への嫌悪となる。

人間とは、その文字の示すように△人の間にあるもの▽として社会の中で存在する。そうである以上、必ずや他者と何らかの関係を保たざるを得ぬ存在である。にもかかわらず△わたし▽は何らかの肉体的、精神的関係を結ばざるを得ない世界を嫌悪する。従って△わたし▽は「ほとんどの時間を病室で過ごすように」なり、「男と女ではなくて、弟と姉」であるおかげで「肉体的な関係」も、精神的な競争も生じ得ない、つまり何の変化も起こさないですむ関係である弟の看病に「完璧な安らぎ」を感じながら、毎日「決まった時間」にやって来て完全に手順の決まった作業を、「無駄な動き」一つせずに「黙々」と完成させ、病室を「上等なシャンペンのようにつやつやと」磨き上げる、まるで清掃ロボットの様な「保清潔の人」に好感を抱き、「何日放っておいても、この病室は何も変わらないだろう。シートもレンジもホーローも相変わらずつやつやしたままだろう。変性しないこと、退化しないこと、腐敗しないこと。そのことがわたしを安心させる。」と語るのである。

そして、この「わたし」の精神を閉ざした世界は弟の主治医であるS医師との関係の一面によく表われている。

#### (四)

「わたし」が死に向かう弟以外に関心を抱いた唯一の人間がS医師である。そのS医師が自分にとって如何なる存在であるかを「わたし」は次のように説明する。

彼はわたしにとって恋人でも夫でも幼なじみでもなく、抽象的な人間だ。二人の間には思い出も未来もなく、死に近づいた弟がいるだけだ。それなのに、弟をいとおしく気持ちいが彼の筋肉を求めている。

恋人でも、夫でも、幼なじみでもない、つまり、「わたし」にとってSは何者でもなく、何者であるとも規定できない。否、規定する必要のない人間である。言い換えれば何者であるとも言葉で名辞されぬ存在で、言葉を越えた存在、つまり「抽象的な人間」である。

鈴木孝夫氏が鋭く指摘したように、我々日本人は他者を、また自らを両者の関係において名づけ、呼ぶ。従って名づけられぬということは両者の間に、名辞に価する程の、また名辞しなければならぬ程の関係はなく、「わたし」にとってSは直接自分に関わって来る人間としての實在感の希薄な存在である。他者存在というものは、何らかの形で自己を規制して来るものである。他者

もしくは自己というものが両者の関係において、その規制の力において意識されるものである以上、そうした関係、規制を感じさせぬ他者とは、いはば道ですれ違うだけの赤の他人であり、自分にとっての意味から考えれば、実体のない人影、つまりは人形、更に言えば自分の好みに応じて如何様にも空想世界の中で変容することのできる存在、つまりは自分自身であることさえ言い得る存在である。そうした存在に安らぎを求めるということは結局、自らの自閉した世界にもぐり込み、安心することに他ならず、「わたし」の精神の閉鎖性を示すものである。

「わたし」にとってSは何者でもないために、最も抵抗のない存在であり、言葉を越えた存在、つまり神のように抽象的なものであるために安らぎを得ることができる。しかし、「わたし」自身をSを「抽象的な人間だ」(傍点筆者以下同じ)と語り、「彼の筋肉を求めている」と語るように、Sが神ならぬ生身の人間であってみれば、そこにはS自身の人間としての肉体も、精神も存在している。

現実世界に存在するもの(物・者)は、すべて変化し消滅する。消滅がなければ新しい誕生はない。「わたし」はそうした現実世界から逃避し、隔離された変化のない世界を病室に求め、その生活臭のまったくない、あらゆるものが整然ととのえられ、その秩序正しい状態には何の変化も起こらない、従って「わたしの心を乱すものは何もない」清潔極まる病室を完璧と感じ、その変化

のない世界に閉じ籠り、安心する。しかし、現実世界の一つである病室では、表面的には、つまり目に見える外部の枠としての室には何の変化もないかのごとく見えながら、その中心をなす弟の身体は着々と変化して行き、△死▽という消滅に向かって進んで行く。従って、病室こそを△生▽のノイズから隔離された「好きな人と一緒にいるのに、理想的な場所だ」と考えながら、そこで「変性していく」△有機体▽を嫌悪し、「できるだけすぐに何もかも、黒いビニール袋に詰め込んでダスト室に運」びながらも、まぎれもなく有機体である弟の、移ろって行く病状に対して△わたし▽は、嫌悪とはまったく別の感情をひき起こす。△わたし▽は「多くの種類の気持ちがいつべんに湧き上がってきて息苦しくなる。かわいそうで、絶望的で、遣り切れなくて、淋しくて、これらが全部混じり合って、濁った色になってしまふ。」と感じ、その死に対して不安な悲しみを抱かざるを得ないのである。そして、この悲しみを慰めることのできたのが唯一、Sの存在である。

△わたし▽はSを初めて身近に見た時、「彼のからだの水に濡れたら、きつと美しいだろう」と思う。△わたし▽は「男の人を見る時、その人の筋肉が水に濡れた姿を想像」し、「水滴のイメージをすんなりとかき立ててくれるようなタイプの男性」に好感をもつ。その意味からSは、△わたし▽にとって申し分ない「すばらしくバランスのいいからだつき」を持っていた。弟のこ

とを二人で話合いながら△わたし▽は常にSの筋肉を意識している。△わたし▽は「自分の気持の中で一番むごい所を口にする時でも、やはり彼の水泳選手的な筋肉の美しさを思い描いていた。そのイメージに快感を覚えながら、同時に弟へのあまりのいとおしさに苦しんでいた」と語る。

ここで語られた、△わたし▽に「快感」を感じさせるSの筋肉は、△イメージ▽である。つまり、それは実体のない、幻影にすぎないもので、現実離れた実在感の薄いものである。この点は先に述べた、名辞されぬ他者の実在感の希薄さに安らぎを感じ得るのと同じことであろう。しかしそのイメージにすぎない筋肉に抱かれたいと申し出た瞬間に、たとえその言葉が無意識的なものであったにせよ、筋肉は実体のないものではあり得ぬ対象となる。ではこの、生身の人間であるところのSによって心安らかに△わたし▽が慰められるとは、一体どういうことなのであるうか。

## (五)

Sと△わたし▽の「間」には思い出も未来もなく、死に近づいた弟がいるだけだ。それなのに弟をいとおしむ気持ちが彼の筋肉を求めていた。」とは、△生▽あるものの変性を嫌悪し、△有機体▽の生み出すドロドロとした世界を嫌悪し、それらを一刻も早く捨て去りたいと感じながらも、結局△わたし▽は△死▽から△生▽への回帰によって救われたいと感じていることを語ってい

るのではなからうか。その矛盾した感情を「それなのに」という接統詞が示している。

△わたし▽は上京して来た弟に、初めていとおしさを感じた時のことを次のように語っている。

その時初めて、わたしは自分の中に、いとおしいという種類の気持ちがあることを知った。そしてとにかく、弟の身体はどこかに触れていたいと思った。わたしは弟に一步近づいて、真つすぐに伸びた背中に掌を当てた。そして、みずみずしく生き生きとしているだろう背中中の皮膚や血管や筋肉を、思い描こうとした。

この時の弟は「みずみずしく生き生き」とした肉体を持っていた。△わたし▽はその△生▽ある弟を好ましく、いとおしく感じ「触れていたい」と思う。しかし弟は徐々にその△生▽を失って行き、ガラス細工のように、か細く、透明になって行くような白さの身体に変わり果てて行く。先の「弟をいとおしく気持ちが……」とは、この△生▽への好もしさ、いとおしさではないか。つまり、△生▽を充溢した生き生きとした存在であった弟を取り戻したいという願望ではなかったかと思われる。それがSの「水滴のよく似合う、滑らかでしなやかな筋肉」という水々しさにあふれた有機体そのものである筋肉を求めさせる。△わたし▽は「——生活に関するあらゆる物をダスト室に投げ込んで、ガラス細工のようにすずやかに生きていけたら……——」と考えながら

も、一方、その「ガラス細工」そのものになって行く弟を眼前に、弟へいとおしさと不安な悲しみにとり込められざるを得ない。

そして、その苦しみから自分を救ってくれるものが△生▽を象徴するかのような、水々しいSの筋肉であることにも△わたし▽は気づいている。Sにむかつて弟の死を口にしながら「わたしはただ、自分の言葉が彼の胸にもたれかかっていくのを、聞いていただけだった。」と語る。

彼の筋肉に完全に閉じ込められた時、肉感的な孤独がわたしを安らかにした。

——このままひっそりと無機物のように滑らかに生きていた方がいいのに。何も変わらず、何も変性せず、何も腐敗せず、このままずっと弟と一緒にいられたらいいのに。——

この安らぎが、「閉じ込められ」た「孤独」の感覚から生み出されたものであるならば、そして、その閉塞された状態の中で、「何も変性」しないことを望んでいることから考えると、このSによってもたらされる安らぎは、病室の完璧な清潔さの中で弟と二人きりで閉じ籠った時に感じる安らぎ、つまりは変化のない自閉した世界へ閉じ籠ることになる安らぎと同質のもののようにも思える。しかし、もしそうであるならば、S以外の人の筋肉、例えば夫の筋肉ではなぜ安らぐことができないのだろうか。右の引用のすぐ前に注目すべき「わたしにとって大切なのは、触れ合うことではなく包まれることだった。」という描写がある。この精



神性の強い描写の意味する、 $\wedge$ わたし $\vee$ が「包まれること」を願ったのはSの何によってであったのだろうか。

夫とSとを比較した際に、まず考えられることとしては、先に述べた $\wedge$ わたし $\vee$ と他者との関係があげられよう。夫は $\wedge$ わたし $\vee$ と $\wedge$ 夫と妻 $\vee$ という一つの固定化された関係を保っている存在である。それに比して、Sは $\wedge$ わたし $\vee$ にとって何者でもない。つまり、そこに何ものにも阻害されない、規定されない、世界が生じ得る。それは $\wedge$ わたし $\vee$ にとっては、自分の好きなように、自分にとって好ましい感情にそって、作り上げることのできる世界である。しかし、さらに夫とSとの違いとして決定的な要因をなすものとして、それぞれの存在のあり方の差が考えられる。

夫は「理学部で遺伝子の研究」に従事する大学助手として、実験に明け暮れ、「毎日極端に帰り」の遅い生活をしている。「わたし」が夫について何かを考えるとすれば、それはいつも夫の不在についてだった。」というのが $\wedge$ わたし $\vee$ と夫との生活の実態である。この夫に対する弟の「義兄さんはどうしてる？」という質問に対して $\wedge$ わたし $\vee$ は「相変わらず実験ばかりやってるわ。実験には終わってもものがないのよね。今日も実験、明日も実験。終わりのない仕事なんて、わたしだったら気が変になるわね。」と答える。この $\wedge$ わたし $\vee$ の返事は、夫の存在のあり方をはからずもよく示し得ている。夫のあり方として説明された「終わりのない仕事」への没頭は、この姉弟の会話のすぐ前に描写されてい

る、 $\wedge$ わたし $\vee$ が病室で弟に対して抱く「終わりがいいような気がした。永遠を信じられそうな気がした。」という感情、変化のないものへの快感、それから得られる安らぎと同種のものである。つまり夫も $\wedge$ わたし $\vee$ 同様、研究室での実験という世界の中へ、閉じ籠り、自閉している人間と考えてよい。同種の人間によつては $\wedge$ わたし $\vee$ は救われようがないのである。

Sの「筋肉」に包まれて、「肉感的な孤独」を味わいながら「無機物のように滑らかに生きて」いきたいという矛盾に満ちた想念、つまり有機物に抱き取られ、あくまで有機物としての存在の孤独の中にうずくまりながら、無機物的世界を求めるといふ $\wedge$ わたし $\vee$ の矛盾した願い（「脈瘍のような涙の塊」を砕き、溶かして、涙として流し出すことを可能にしてくれたものは、Sの筋肉に「暖かくて安全で静かで官能的でさえある」力を与えるSの存在のあり方である。それでは、Sのあり方とはどのようなものなのか、彼の吃音りと孤児院で孤児として育った生い立ちがそれを説明してくれると思われる。

Sは $\wedge$ わたし $\vee$ に弟の病状を説明したいと電話をして来た最初のときから少し吃った。Sが「小さく息を吞んで、言葉の口の中に含んでしまうたびに」、 $\wedge$ わたし $\vee$ は「彼の頬を両手で撫でて、縮こまった舌をやわらげてあげたく」なる。その「危なげな」「喋り方のリズム」には他者を威圧し、圧迫するものはない。吃る言葉は相手を攻撃する武器にはならないのである。 $\wedge$ わたし $\vee$

は「彼の人柄の良さは全部、この吃った喋り方に表われている」ように感じる。Sは吃音りながら語ることによって、いはば吃音りのおかげで、他者と闘争的でない関係を結び、相手を優しい気持ちに導き、柔らかくて暖かい人間関係を結び得ると言っているのである。そして更に、Sの実存の仕方をより深く決定づけているのは、彼の孤児としての△生▽の体験、つまり孤児としての△生▽の意味、その生活様式であった。

Sは、教会を孤児院として営む両親によって、孤児たちの中で、他の実際の孤児たちよりもさらに完全な孤児として扱われ、育てられる。孤児院での孤児の生活とは、それぞれに種々様々な事情を抱えた多くの孤児たちが自分とはまったく異なる生活習慣を持つ他の孤児たちに囲まれ、いやおうなくそれら雑多な存在との関係に組み込まれながら他者と共存共生することである。自らは常に孤児であるという事実で強要される孤独を感じながら、それ故にこそ孤児院からのがれることはできず、従って雑多で無秩序な他者との調和をはかり、自己を制御し、すべてを受け入れることを学び、バランスを取りながら生きることを、生きのびることを日々の課題として生活している。つまり、他者と共有されることによって、その雑多の中で初めて存在可能となる生の形態である。こうした、他の多様性に富んだ存在を許容しなければ生きて行かない世界での生活経験が、Sのあり方を本源的に支える孤児としての△生▽である。

この経験はまた、Sの実際に即した清朗な力強いあり方をも決定づけている。弟の看病に不安を語る△わたし▽に「抽象的な考え方から出て来る結論は、やっぱり抽象的なもので、それじゃあ自分を納得させるのに力不足」であると忠告するSは、常に具体的にものごとを捉え、説明する。目の前に起こっていることをそのまま事実として受け入れて対処し、そこに提示されたものごとだけを見据えて、自分の態度を決定することができるのである。

従って、唐突に「抱いて欲しい」と申し出た△わたし▽に対して、Sは△わたし▽が具体的に「答えられることしか聞か」ない。つまりSが多様な他者の一人として△わたし▽をありのままに受け入れてくれるために、△わたし▽は「立ちすく」まずにすむのである。このSの△生▽は、無秩序に混乱した母親との生活を嫌悪し、自閉した変化のない世界で無機物のように生きて行きたいとする△わたし▽の△生▽の対極に位置するものである。こうした△生▽を持つSによって△わたし▽はじめて慰められ、救われるのである。

Sという、暖かみと「人の良さ」を持った、他者の△慰め▽となり得る存在を可能とする本源であるところの、彼の孤児としての△生▽、その本源を生み出した故郷の孤児院へ、Sは都心の大学病院をやめて帰って行く。孤児院での△生▽とは種々雑多な多様な存在をありのままに認め、そのまま受け入れる寛容さの上に

成り立つものであり、言い換えれば、他（者）に向かつて聞かれた世界としての「人生」である。一方「わたし」が病室で求めた完壁な、無機物のような「人生」とは、雑多をダストボックスへ捨て去り、認めない、閉じられた世界としての「人生」である。この閉じられた世界を志向しながらも、結局は開かれた世界を持つ他者によって救われる「わたし」の姿は、近代工業の生み出す画一化された無傷、無菌なものを正しい良いものとして、求め、それからはずれるものを切捨てるという生活をしている現代人への、人間の具体的な「人生」とはそうしたものは対極にあるものだということ、換言すれば、自然があらゆるものを包容しているように雑多を許容して初めて豊かな暖かいものとなるということを知らせる、自然から切り離された我々現代人への警告ではないだろうか。

# 〈注〉

(1) 朝日新聞「世相・諸相——あらう考——」（一九九〇・四・七）。一九九〇年六月の倉敷市民会館における読書会で、中原省五氏によって「完壁な病室」が取り上げられた際に、同氏によって教示されたものである。

(2) 「完壁な病室」所収（一九八九・九 福武書店）

(3) 鈴木孝夫「閉ざされた言語・日本語の世界」（新潮社）参照

（岡山商科大学助教授）

## 研究室受贈図書雑誌目録

- 東横国文学（東横学園女子短期大学） 第二十二号
- 富山大学教育学部紀要 国語科関係論文 第三十八号
- 奈良大学紀要（国文学研究室編） 第十八号分冊
- 日本研究（国際日本文化研究センター） 第二集
- 日本語学文学（三重大学） 第一号
- 日本語と日本文学（筑波大学） 第十二号
- 日本文学（明治大学） 第十八号
- 日本文学（立教大学） 第六十三号、第六十四号
- 日本文学紀要（昭和女子大学大学院） 第一集
- 日本文学研究（大東文化大学） 第二十九号
- 日本文学研究（帝塚山学院大学） 第二十一号
- 日本文学ノート（宮城学院女子大学） 第二十五号
- 日本文学論究（国学院大学） 第四十九冊
- 日本文学論集（大東文化大学院） 第十四号
- 日本文学研究（関西学院大学） 第四十一卷第二号、第三号、第四号、第四十二卷第一号、第二号
- 日本文学論集（山梨英和短期大学） 第二十一号
- 日本文学論叢（東北大学） 第八号
- ノートルダム清心女子大紀要（国語国文学篇） 第十四卷第一号
- 花園大学研究紀要（花園大学文学部） 第二十一号